

論文審査の結果の要旨

報告番号	甲 第 1266 号	氏 名	小 川 洋 平
論文審査担当者	主 査 花 岡 正 幸 副 査 石 塚 修・梅 村 武 司・今 田 恒 夫		

(論文審査の結果の要旨)

活動性結核は潜在性結核感染症から発症することが多く潜在性結核感染症の治療は今後の結核根絶のため重要な治療戦略である。特に血液透析患者は潜在性結核感染症からの活動性結核発症リスクが高く、積極的に治療検討を行うことが推奨されている。しかし、日本国内の血液透析患者の潜在性結核感染症の有病率やリスク因子、病院の機能や立地により有病率に違いがあるのかどうかなど不明な点も多く、今回の研究を行った。本論文では信州大学医学部附属病院の関連施設のうち機能や立地の異なる3病院で外来維持血液透析中の118名を対象としてインターフェロン-γ遊離試験(Quantiferon®-3G、以下QFT)を用いて潜在性結核感染症の診断を行い、臨床データとともに統計解析を行って検討した。

その結果、小川は以下の結論を得た。

1. QFT 陰性群に比べて潜在性結核感染症確定患者群(QFT 陽性)、潜在性結核感染症疑いの患者群(QFT 判定保留+陽性)は高齢であり、年齢はリスク因子で60歳代から増加した。
2. 腎不全の原疾患として潜在性結核感染症確定患者群では腎硬化症が多く、潜在性結核感染症疑いの患者群では腎硬化症、原疾患不明が多く、また慢性糸球体腎炎が少なかった。腎硬化症は高齢者において一般的な腎疾患であり、また高齢者ほど腎不全の原疾患不明も多くなるなど原疾患の有意差は年齢による影響が大きいと考えられた。
3. QFT 判定保留は透析歴が長くなるほど出やすくなるため、より明確な結果を得るためには透析導入期に検査を施行すべきである
4. 病院の立地や機能によってQFT 判定結果割合に差がなく、どんなタイプの病院でも潜在性結核感染症のスクリーニングをすべきである。

これらの結果より、病院の立地や機能に関わらず、60歳以上の血液透析患者や新規の血液透析導入患者に対して積極的に検査を施行すべきである。本研究は、血液透析患者の潜在性結核感染症の治療戦略に対して有益な情報を提示していると考えられる。

よって主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。